明治後期から大正期の滋賀県西部の 里山ランドスケープにおける山林資源利用の変化

Changes in the Uses of Forest Resources in Satoyama Landscape in the Western Part of Shiga Prefecture between the Late Meiji Period and the Taisho Period

堀内 美緒* 深町加津枝** 奥 敬一*** 森本 幸裕****

Mio HORIUCHI Katsue FUKAMACHI Hirokazu OKU Yukihiro MORIMOTO

Abstract : This study investigated how local people used forest resources in daily life according to seasons or years in satoyama landscape (local village landscape), and how the seasonal cycle of the uses of forest resources and the landscape changed between 1900 and 1922. The investigation was mainly based on a diary written between 1900 and 1922 by a farmer of a rural village in the western part of Shiga Prefecture. Moreover, governmental and local records were analyzed and some of the elders in the village were interviewed. GIS was used to create a link between the seasonal cycle of forest resources uses and the satoyama landscape. Both the kinds of uses (such as plantation and grass-cutting) and the seasonal cycle of the uses of forest resources changed in relation to governmental forestry and agricultural policies. Changes in the position of the writer in the village and in his family resulted in uses differences as well.

Keywords: *Satoyama landscape, diary, forest resources uses, time axis, seasonality*

キーワード: 里山ランドスケープ, 日記, 山林資源利用, 時間軸, 季節性

1. はじめに

全国的に里山を舞台とした景観保全や自然再生への取り組みが活発になっている。こうした二次的な自然を中心としたランドスケープを適切に理解するためには、土地利用の中の空間的なモザイク性ととともに、人間の働きかけや社会的な動向を背景とした時間的なモザイク性を考えることも重要であることが指摘されている¹⁾。

また、二次的な自然の保全や管理に当たっては時間的な起点をどのように設定するかが議論となることが多い。こうした、人間の働きかけと景観構造との関係を遡って考えるときに重要となる時代として、明治期が注目されている²⁾。明治期は、仮製地形図や迅速図の登場により比較的正確な位置情報を伴った景観構造を広域でとらえることができるという利点もあり、さらに近代化の影響を受ける以前の景観構造と人間活動の関係が残っていた時代として現在までの変化を考える上での起点になると捉えられるようになった。一方で、明治期の国家的な近代化政策は当然、農村も巻き込んで展開していったのであるが、この時期の政策が農村や里山ランドスケープの構造に具体的にどのような変化をもたらしたのかについては、資料の限界などからこれまで十分に議論されているとは言えない。

堀内ら³⁾は、資料として明治後期に農民によって書かれた日記に着目することにより、山林資源利用を分布と頻度をもった型「パターン」として把握し、明治後期の地域住民による里山ランドスケープ形成への関わり方を示した。日々の作業や労働が記された日記は、一日または半日を単位として日常生活の中で行っていた人間活動や地域資源への働きかけが時間軸上で記録されている。このように、人間活動やその背景となった社会的な動きを里山ランドスケープ形成との関係で再現する上で、日記は有力な素材となる可能性がある。

日記を素材に、明治・大正期農村の生活構造を季節循環や年変化の視点から分析した先行研究としては中西⁴⁾や川口⁵⁾などがある。

また、永田⁶⁾は、作業の季節性と生産・生活のリズムのなかで作業が一定の季節性をもちながらくりかえていた点を平地林管理の特徴として見出している。しかし、農村生活における労働、または地域資源そのものに主眼が置かれ、空間的な観点から里山ランドスケープ形成の要因としての分析にまでは踏み込まれていない。

堀内ら³⁾の分析では、明治後期の地域住民による多様な山林資源利用の形態と資源の種類ごとの空間の使い分けを明らかにし、さらに生業によって里山ランドスケープ形成の関わり方が異なることを明らかにした。本研究では、これをさらに時間軸的な観点から発展的に分析することに主眼を置き、明治後期から大正期の滋賀県西部を事例に、山林資源利用の季節的なサイクルおよび明治後期から大正期の22年間の地域住民と里山ランドスケープの関わりの変化を明らかにする。そして、山林資源利用が季節に応じてどのようなサイクルで行われ、それがどのような空間的分布や頻度で行われていたのかを明らかにし、里山ランドスケープの形成との関係を考察することを目的とする。堀内ら³⁾の研究では、集落の空間構造の中に地理的に位置づけられる、分布と頻度をもった利用の型を「パターン」と呼んだ。本研究でも同様の意味で「パターン」を使用する。

2. 研究の方法

(1) 日記分析

分析対象とした日記は、滋賀県大津市(旧志賀町)八屋戸地区守山集落の農家T氏(1881-1963)が明治33年(1900)7月30日から大正11年(1922)7月5日に記したものである。守山集落は、滋賀県西部に位置し、面積は約360ha、明治期の人口は約60戸であった。稲作農業と、農閑期に比良山地の薪や用材を売って生計をたてる家が多く、T氏もその一人であった。T氏は水田を約1ha所有する自作農であった。また、T氏の家は、少なくとも先々代の明治初期から家業として農具を作る農鍛冶を営んでいた。

日記の分析としては、日記に記述された山林資源に関する作業

*京都大学大学院農学研究科 **京都府立大学人間環境学部 *** (独)森林総合研究所関西支所 ****京都大学大学院地球環境学学

を全て抽出し、作業を「山行」「柴・割木」「山草」「植林」「村植林」「その他」の6項目に分類した。「山行」には単に「山行」または「山へ取りに行く」と記述されたものを分類した。「柴・割木」は、燃料にするための山林資源採取に関する作業であり、特に柴、割木、たきもん、はさきものなど作業の対象が明記されているものである。「山草」は山草の類を採取したり、運び出す作業のことである。この場合の山草には低木や雑木の若い芽なども含まれる。「植林」は苗木を育てる作業や、スギやマツ、クヌギなどの個人的な植林に関わる作業である。「村植林」は村や集落単位で数十人から数百人規模で行われた植林作業である。以上に該当しない作業は「その他」とした。

そして、分類項目ごとに明治33年(1900)7月から大正11年(1922)7月の22年1ヶ月間について、月別の作業日数を集計した。次に、作業日数の年変化をみるために、1年間の分類項目ごとの作業日数を集計した。これは、1年間のデータがある年に限り、明治34年(1901)から大正10年(1921)の21年間について行った。また、山林資源利用以外の作業との関連を見るために、「稲作業」「畑作業」の農作業や家業の「かじや」、「養蚕・桑作業」についても作業を抽出し、同様に月別と年間の作業日数を求めた。

(2) 史料分析と聞き取り調査

日記の書かれた明治後期から大正期の時代背景を特に山林関係を中心に史料分析で整理した。滋賀県の政策を把握するために、行政資料⁷⁾や滋賀県の歴史に関する文献⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾を利用した。村・集落の動きを把握するために、町史¹¹⁾¹²⁾¹³⁾や財産区有文書¹⁴⁾¹⁵⁾¹⁶⁾を利用した。また、大正～昭和初期生まれの守山集落住民12名および木戸集落住民の1名を対象に山林資源利用に関して聞き取り調査を行った。守山集落と木戸集落はともに、明治22年(1889)の町村制によって誕生した木戸村の構成集落であった。聞き取り調査は、2002年6月～2006年9月にかけて実施した。

(3) GISによる季節的なサイクルとパターンの抽出

山林資源利用の季節的なサイクルとパターンを明らかにするために、ArcGIS(Ver.8.2)を用いて分析を行った。季節的なサイクルを把握するために、稲作業を基準に、12ヶ月を4季節に分けた。4季節は、田植えが始まるまでの3～5月(春季)、田植えから草取りまでの6～8月(夏季)、稲刈りまでの9～11月(秋季)、稲作業がひと段落した12～2月(冬季)とした。次に、それぞれの季節において通称地名ごとに行われた山林資源に関する作業の年平均日数を求めた。そして、作業を行った通称地名の位置と作業の年平均日数の関係からパターンを示した。通称地名の位置は、聞き取り調査と現地踏査で把握した。

3. 結果

(1) 山林資源に関する作業の月別日数

明治33年(1900)7月から大正11年(1922)7月までの作業の月別日数を整理した中で、T氏が20歳の時の明治34年(1901)のものを図-1に、T氏が39歳の明治9年(1920)のものを図-2に示した。山林資源に関わる「山行」「柴・割木」「山草」「植林」「その他」を縦軸のプラス方向に、農作業の「稲作業」「畑作業」や「かじや」「養蚕・桑作業」を縦軸のマイナス方向に示した。

明治34年(1901)のT氏が20歳の年には、山林資源の作業日数のピークは4～5月と7～8月の2回現われた。4～5月は「山行」が中心で、7～8月は「山草」が中心だった。7～8月頃に刈った山草は、守山集落では「よくさ」と呼ばれ、牛の敷き草や飼料として利用された後に田んぼの肥料となった。明治34年(1901)のよくさの採取量は538把であった。1月と3月は、「植林」がみられた。この年は、1月にマツを植林し、3月は畑へクヌギの苗木植えを行った。また、その他の山林資源の作業が年間を通して分散して現われた。例えば明治34年(1901)においては、1～2

図-1 明治34年(1901)における作業の月別日数

図-2 大正9年(1920)における作業の月別日数

月に燃料にするためにスギやヒノキの根っこを掘り出す作業を行い、3月に下刈、8月にシキミ採り、11～12月に竹切りや松葉や落ち葉を採取する作業を行った。

以上のような山林資源に関する作業は、「稲作業」「畑作業」「かじや」と対になるようなリズムで現われた。4～5月に現われた山林資源の作業日数のピークが終わると、6月には「稲作業」の日数がピークに達した。「稲作業」は5月の代掻きなど田植えの準備、6月は田植えがあり、7～8月は草取りや虫取りの作業があった。10～11月は、稲刈や脱穀などで作業日数が再び増加した。

明治34年(1901)に「畑作業」で作っていた作物は、日記から分かる範囲で、麻、レンゲ、サツマイモ、大根、豆、ゴボウ、菜種、小麦、大麦であった。特に、菜種と麦(小麦、大麦)は、「稲作業」の裏作として行われた。菜種は、11月に稲刈りが終わった田んぼから順次、種蒔きが行われ、田植え前の5月に刈り取りが行われた。麦もまた11～12月に稲刈り後の田んぼに麦蒔きが行われ、1～3月に中耕、そして6月に刈り取りが行われた。

2月と3月は作業日数が少なかった。これは、2月は縄やぞうり、蓆などを作る藁仕事が多かったためであり、3月は、神社や講の行事、年度末で村の会計などの仕事が多かったためである。

一方、大正9年(1920)においても、3～5月と、8～10月の山林資源の作業日数のピークは明治34年(1901)と変わらなかった。ただし、作業内容を見ると、8～9月に新たに「村植林」が登場した。これは、主に植林した後の下刈であり、日記には「そうじ」または「そうじ刈」と記載されていた。また、1～2月には明治34年(1901)にはみられなかった山林資源の作業日数のピークが

図－3 明治34年(1901)から大正10年(1921)における年間作業日数

現われた。この内容は大部分が採取してきた柴を整えて束ねる作業であった。

明治34年(1901)と大正9年(1920)で、「稲作業」と4月前後の「山行」、7～8月の「山草」のリズムは基本的に同じであった。大正9年(1920)になると1～2月の「柴・割木」、8～9月の「村植林」と6～7月の「養蚕・桑作業」が新たな作業として加わった。その一方で、「かじや」の日数が大きく減少した。

(2) 年間作業日数の21年間の変化

作業の分類項目ごとに年間の作業日数を集計し、明治34年(1901)から大正10年(1921)までの21年間の変遷を示したものが図－3である。

明治44年(1911)、明治45年(1912)および大正10年(1921)は全体的な作業日数が減少した。この3年間は、T氏が集落の区長をしていた時期であった。

山林資源に関する作業の中でも「山行」の作業日数は年40日前後で21年間ほぼ一定であった。「植林」と「山草」は年を経るごとに減少傾向をみせた。その一方で、「柴・割木」の作業日数が増加傾向をみせた。「柴・割木」は作業の内容の面でも変化した。T氏が20歳代の頃は、春季や秋季の柴刈がその大部分だった。例えば、明治34年(1901)5月12日には「春山柴十六ばひ刈たり」とあり、明治35年(1902)4月25日にも「春山凡十九はい刈 松バとも」と春季に採取した柴の量の記述がある。明治39年(1906)になると「枯切込百束に付凡三円八九十銭四円成」という記述が登場する。切込(きりこめ)とは、質のよい木の枝や低木を束にしたもので、販売用に特に形を整えた燃料であった。そして、大正期に入り、T氏が30歳代になると冬季に柴を束ね、切込を整える作業が増加した。主に商品にするための作業であったと考えられる。

21年間の作業日数の大きな変化の1つに、明治40年(1907)以降「村植林」が増えたことが挙げられる。「村植林」は、村有林または集落の共有林への植林事業にともなう作業であった。内容としては主に4月前後の植林と9月前後の下刈が中心であった。この作業の特徴は、地域住民が労働者として参加し、手間賃をもらう点であった。

例えば、大正5年(1916)8月26日の記述には、「掃除刈人足百五十五人 一人平均四十銭手間となる」とあり、村有林の植樹地の下刈作業に参加して、40銭の手間賃をもらったことが分かる。しかし、T氏は単に労働者として参加するだけでなく、集落の植林を実際に請け負い、実行する役割も担っていた。T氏が区長をしていた明治45年(1912)の守山区有文書¹⁴⁾から当時の植樹費の収支をまとめたのが表－1である。明治45年(1912)度には集落

表－1 明治45年(1912)度に守山集落が支払った植樹費とその内訳

内訳	(円、銭、厘)
杉苗800本	8.80.0
桧苗1100本	13.00.0
杉苗植手間(13人分)	7.80.0
植樹地掃除刈(10人分)	11.23.5
橋直し手間など	2.90.0
苳・セメント代	0.90.0
合計	44.63.5

で「植樹費」として44円63銭5厘の費用を支払っている。また、同年度の収入の一つに、県庁からの植樹奨励金として5円55銭があった。

2つ目に挙げられる21年間の大きな変化は、大正5年(1916)以降「養蚕・桑作業」の日数が増加した

ことである。養蚕業の発展と桑園の拡大は、明治期から昭和恐慌の起こった昭和初期頃まで全国的に展開していた動きであった¹⁷⁾。守山集落の属する滋賀郡でも殖産興業の一つとして養蚕事業を挙げ、山林原野や畑地の桑畑への開墾と蚕の飼育法の普及を奨励していた¹⁸⁾。T氏は大正7年(1918)には、山林を開墾して桑園化を進めた。大正7年(1918)3月8日の記述をみると「凡三十人にて桜山開墾する」とあり、続いて3月9、10日には「桜山くわうえ」とある。養蚕でできた蚕繭は、日記によると近隣の和邇村へ売っていた。大正4年(1915)には夏蚕繭を売って17円50銭の収入を得、大正10年(1921)になると春蚕繭によって85円の収入を得るようになった。

一方、家業である「かじや」の作業日数は、明治40年(1907)頃まで年50日以上であった。それが、大正期に入ると年10日以内に減少した。「かじや」の代わりに、新たに植林事業の労働、柴や蚕繭の販売などで収入を得る生活へとシフトしていったと考えられる。その中でも、変化のなかった作業は、年約40日の「山行」、約120日の「稲作業」、約50日の「畑作業」であった。

(3) 県や集落による山林政策とT氏の集落・家族内での社会的地位

明治34年(1901)から大正10年(1921)の21年間におけるT氏の作業日数や内容の変化の背景的な要因としては、T氏の家族構成の変化、集落内での社会的地位の変化、滋賀県や集落による政策面の3点が主に考えられる。表－2は、明治期から大正期における国や滋賀県による山林を中心とした政策、木戸村や守山集落の山林をめぐる動向、集落内での社会的地位や家族構成の変化を中心としたT氏に関する主な出来事を年表にしたものである。また、その年のT氏の年齢も示した。

滋賀県では明治初期の森林の濫伐によって、山地は荒廃し、長雨によって引き起こされた明治28～29年(1895-1896)の大水害を初めとして洪水や土砂災害が起こった。そのため、滋賀県は河川工事と砂防工事に力を入れ、その一方で、造林奨励と森林保護にも力を入れた。特に、植樹奨励の面では、明治15年(1882)度の樹苗圃設置に始まり、植樹奨励金交付や樹苗の無償交付が政策として行われた。明治35年(1902)度からは15ヵ年継続の植林事業が開始された。この事業は、植樹奨励金の交付や荒廃公有林野の開発などを内容としていた。

明治43年(1910)になると全国で部落有林野統一事業が始まった。これによって、山林局は生産性が低い部落有林野の整理をめざし、内務省は町村の財政的基盤の強化をめざした¹⁸⁾のである。これに先立って滋賀県では明治42年(1909)、部落有財産を市町村に移管し、市町村の基盤を強固するように訓令を出した。そし

表－2 明治～大正期における国・滋賀県・木戸村・守山集落による山林政策およびT氏に関する出来事

和暦	(西暦)	国	滋賀県	木戸村, 守山集落	T氏 ※は作業の変化に関連する事柄	年齢
明治15	(1882)		樹苗園設置			1
明治17	(1884)		「共有山林保護例」制定			3
明治19	(1886)		「民林取締規則」制定			5
明治20	(1887)		「民林植樹奨励金下付規則」制定			6
明治22	(1889)	市制・町村制施行				8
明治29	(1896)			守山, 共有林約6haを山割	この頃山調方に入る	15
明治30	(1897)	森林法公布				16
明治35	(1902)		「第一次15ヵ年継続事業」開始 / 管内の4林区に樹苗園設置し, 無立木林等に樹苗及び奨励金交付 / 林業奨励規則により, 郡市町村に荒廃公有林野の植樹造林計画をたてさせる			21
明治38	(1905)		県第一模範林を滋賀郡木戸村木戸に設置	守山, 約9ha山割		24
明治39	(1906)		林業奨励規則による分苗園を設置	木戸村, 県第一模範林に植栽開始	山調方引退, 消防組に入る ※「切込」百束で約4円	25
明治40	(1907)	森林法改定	「種苗交付規則」制定	守山, 村有林への植林事業開始	結婚, 長女誕生	26
明治41	(1908)		「森林法施行規程」制定	木戸村, 模範林植栽完了		27
明治42	(1909)		部落有財産を市町村に移管し, 市町村の基盤強化を訓令	守山, 約15ha山割	勤儉貯蓄組合長就任, 弟養子にでる	28
明治43	(1910)	地方改良運動開始 部落有林統一事業開始	「公有林野造林補助規程」制定			29
明治44	(1911)			木戸村, 木戸造林森林組合設立	区長就任 (M44. 4～T2. 3)	30
大正2	(1913)				村会議員就任 (T2. 4～T3. 3)	32
大正5	(1916)				※村有林の掃除刈で1人40銭の手間賃	35
大正6	(1917)		「第二次15ヵ年継続事業」開始 / 「公有林野施業規則」制定			36
大正7	(1918)		「造林奨励規程」制定 / 造林用優良種子採取のため母樹の選定		※桑園化のために山林開墾	37
大正10	(1921)				区長就任 (T10. 4～T11. 3)	40

て、明治43年(1910)の公有林野造林補助規程、大正6年(1917)の公有林野施業規則などによって、部落有林を町村基本財産に組み込むための政策を推し進めた。

このような滋賀県の動きの中で、守山集落のある木戸村では明治39年(1906)に県の第一模範林が設置された。この模範林は神崎郡の富豪の寄付によって始まったものであり、造林地の経営方法や収益を一般に示すことが意図とされた。植栽樹種は、スギ(25,400本・4町)とヒノキ(74,200本・12町4621歩)、植栽面積は16町4反6畝21歩であった⁷⁾。第二模範林は伊香郡に設置されている。

また、明治44年(1911)には、県下に先駆けて木戸村に「木戸造林森林組合」が設立された。設立の目的は「森林の荒廃を防止し及荒廃せる森林を回復し国土保安に適合すべき方法に依り森林を利用する」ことであり、事業項目の第一に「植栽」を掲げた⁷⁾。

滋賀県の第一模範林、第一号森林組合が木戸村にできた時期に、守山集落でも木戸村の村有林が設置され、スギやヒノキの植林が進んだ。守山集落の共有林に関して明治期に起こったもう一つの大きな動きとして、山割が挙げられる。山割は明治29年(1896)から42年(1909)の間に3回行われ、約30haの共有林が各戸に平等に分配された³⁾¹⁵⁾。1戸あたり約45aの山林が割り当てられ、管理が任せられると同時に、一定の条件の下にその山の収益が認められた。守山集落では、短冊上に分割された山林は、くじ引きで平等に配当をきめたため「家くじ山」と呼ばれた。

このような山割は、滋賀県では近世初期17世紀からみられた入会山林利用の特殊形態の慣行であった。田畑所持高にかかわりのない平等割の場合、農村に対する商品経済の浸透がその主な原因の一つとして指摘されている。林産物が商品化し、商品化した薪や炭、建築用材などを各戸が個別的に植栽できるようにと分割の方向に進む⁸⁾といわれている。

T氏に割り当てられたA山とB山の利用を、山割の前後で比較してみると、A山は、集落で利用に規制のかかった共同の草刈場であった。A山の山割後もこの場所では「よ草刈・すすき刈」を行う一方で、「木うえ」「そうじ」の作業が新たに登場した。また、同じく共同の草刈場で、「はさきもの刈」「たきもん刈」と燃料の枝や柴を得る場所であったB山では、山割後「杉うえ」が行われた。このように、山割によって、スギなどの植林が進められ、次第に共同の草刈場が解体していったと考えられる。

一方、日記の期間におけるT氏の家族構成や集落内での社会的地位の変遷をみてみると、日記が始まった明治33年(1900)時

点において、T氏の家族は、祖父、祖母、父、母、T氏(19歳)、弟3人の8人であった。弟3人は同じ集落の分家や京都へ養子に出ている。また、家族以外の労働力として女中が1人いた。

T氏は明治31年(1898)に17歳で元服し、その時には、集落の青年層の伝統的な年齢集団である山調方の一員であった¹⁶⁾。山調方は、若衆とも呼ばれ、祭礼や村仕事の担い手であり、青年層の教育機関としても機能していた。特に、守山集落では集落の財産である共有林を管理し、規則に違反する者を取り締まる役割が与えられていた¹⁹⁾。T氏は、明治39年(1906)の25歳の時に山調方を引退し、同年から大正3年(1914)の33歳まで消防組を勤めた。明治42年(1909)には、勤儉貯蓄組合組長となった。消防組や勤儉貯蓄組合は、明治21年(1888)の市制町村制によってできた行政村の基盤を強化する中で組織されてきたものであった²⁰⁾。消防組は、明治27年(1894)「消防組規則施行細則」が定められ⁹⁾、滋賀県のほとんどの町村で組織された⁸⁾。勤儉貯蓄は、明治43年に政府によって勧められた地方改良運動の一つとして奨励された。

T氏は30歳となった明治44年(1911)から大正2年(1913)までの2年間、集落の代表である区長を勤めた。区長を終了した大正2年(1913)からは村会議員に選ばれた。40歳となった大正10年(1921)には再度区長となり、大正11年(1922)からは集落の青年層の世話をする山調方の宿親になった。

以上から、T氏の集落内での社会的位置は20歳から40歳まで大きく3期間に分かれたといえる。つまり、1)明治30年代(20歳前半)の山調方時代、2)明治40年代(20歳後半)は集落や行政村の基盤強化を担った時代、3)明治44年(1911)から大正期(30歳代)にかけての集落の代表として運営に携わった時代、の3期間であった。

明治40年(1907)は、T氏が山調方を引退して集落運営を担う世代に入った年であるとともに、結婚や子どもの誕生を迎えた年であった。また、集落にとっても、明治40年(1907)は共有林への植林事業が開始された年であった。T氏や集落の山林資源利用を考える上では、明治40年(1907)が一つの転換点だといえよう。

(4) 山林資源利用の季節的なサイクルとパターン

明治40年(1907)の村や集落による植林事業開始以前と以後にわけて、山林資源利用の季節的なサイクルとパターンを示したものが、図－4と図－5である。図－4は、「山行」「柴・割木」「山草」「植林」「村植林」「そのほか」の作業項目について、明治34～39年(1901-1906)までの季節的なサイクルとパターンである。また、明治40～大正9年(1907-1920)までの季節的なサイクルと

図-4 明治34~39年(1901-1906)における季節的なサイクルとパターン

図-5 明治40~大正9年(1907-1920)における季節的なサイクルとパターン

図-6 守山集落の山林所有

月、大正10年(1921)以降のデータは除いた。図中の円グラフの位置は作業が行われた通称地名の位置を示す。各地名で行われた作業ごとに年平均日数の比率を表示し、それらの合計日数を円グラフの大きさで示した。日記に記された山林資源に関する通称地名は全部で54地名であった。その内44地名について場所を確認し、今回の分析対象とした。また、作業をした地名がそもそも記述されていないことも多かった。その結果、全作業数に対してパターンとして示すことができた作業の割合は約43%であった。

守山集落の山林所有と宅地の分布を図-6に示した。標高100~150m付近に宅地がまとまっていた。宅地周辺の標高100mから300mは私有林、傾斜が急になる標高300mから500m付近までは明治後期に山割りでできた家くじ山があり、山頂の1100m付近までは共有林であった³⁾。また、宅地周辺から湖岸(85m)までは水田が広がっていた。

図-4の明治34~39年(1901-1906)において、3~5月における1つ目の特徴は、標高500m以上の共有林への「山行」の頻度の高さであった。この「山行」は主に、柴やナラ類・シデ類などの雑木の採取に関する作業だと考えられる。2つ目の特徴は、「植林」の分布が広いことであった。宅地周辺に現われた「植林」のパターンは、畑地での苗木の育成であった。一方、標高300m付近のパターンの内容は主にT氏の私有林への個人的な植林であった。6~8月は、標高200~500mに「山草」のパターンが集中した。9~11月は、宅地周辺から標高800m付近の共有林まで「山行」のパターンが分散した。しかし、3~5月の春季の「山行」に比べると、高い標高域の共有林への頻度は低かった。

日記には天候に関する記述もあり、雪の記録も残っている。それによると、早い年には11月上旬になると標高1000m以上の比

良山地の山頂付近に雪が積もり始めた。雪が宅地周辺まで降りてくるのは12月中旬ごろであった。12~2月は、積雪のあった時期であり、山林資源利用のパターンが宅地周辺の私有林に集中した。内容としては、「山行」を中心に「植林」と「その他」の作業が多かった。「その他」の作業としては、例えば、落ち葉かきや竹切りなどの作業であった。

図-5に示した明治40年~大正9年(1907-1920)の季節的なサイクルとパターンに関しては、3~5月では、共有林の北側への「山行」のパターンと、南側への「村植林」のパターンが高い頻度で現われた。6~8月は、明治40年(1907)以前と同様に標高200~500mへ「山草」のパターンが集中した。9~11月には、共有林の南側への「村植林」のパターンが高い頻度で行われた。その一方で、明治40年(1907)以前と同様に、宅地周辺から標高800m付近の共有林の北側への「山行」のパターンが分散した。12~2月は、「山行」「柴・割木」のパターンが標高500m付近の共有林までみられた。これは、秋季に植林の前段階として雑木や切り株などを取り除く作業が行われた後に、冬季の作業として伐採した木や柴を運び出し、利用するための作業であった。このように「村植林」に伴った新たな山林資源利用のパターンもみられた。また、冬季と春季には宅地に近い100m付近の私有林が開墾され、養蚕のための桑畑に転換された。

明治40年(1907)以前と以後の季節的なサイクルを、標高100mから300mの私有林に着目して比較すると、春季と冬季の個人的な「植林」が減り、桑畑への「開墾」が行われた。しかしながら、春季の「山行」—夏季の「山草」—秋季の「山行」—冬季の「山行」「その他(落ち葉かきや竹切など)」は、明治40年(1907)前後でほとんど変化がなかった。この標高100~300m付近での「山行」は、ナラ類などの雑木やマツの採取に関する作業が中心だと考えられる。

共有林の北側については、春季は高頻度の「山行」—秋季「山行」—冬季「山行」「柴・割木」となり、季節的なサイクルとパターンも明治40年(1907)以前と以後でほぼ同じであった。

一方、共有林の南側では明治40年(1907)以前と以後で、季節的なサイクルとパターンに顕著な変化がみられた。その中でも、標高500m以上は、明治40年(1907)に開始された村や集落レベルでのスギやヒノキの植林事業によって引き起こされた変化であった。この場所では、12~5月においては「山行」、6~11月においては「山草」の利用という季節的なサイクルがみられた場所であ

た。それが、植林事業にともなって、明治40年(1907)以後には、植林前に雑木や切り株などを取り除く伐採—スギ・ヒノキの植栽—下刈という新たなサイクルが生まれた。

共有林の南側のうち標高300～500mは、明治40年(1907)以前では、夏季に「山草」利用のパターンが顕著に現われた場所であり、利用に規制のともなう共有の草刈場でもあった。明治後期に行われた山割は主にここを対象に行われ³⁾、山割が進んだ明治40年(1907)以後になると「山草」利用のパターンの頻度が減り、春季に「植林」が新しく登場した。このように、山割の過程の中で引き起こされた山林資源利用のパターンの変化がみられた。

4. 考察

本研究では、明治後期から大正期の一農民の日記を用いて、21年間にわたる山林や耕地等での労働作業日数の変化と、山林資源利用の季節的なサイクルとパターンを明らかにした。

滋賀県西部の守山集落の里山ランドスケープにとって、明治後期から大正期は、集落の共有財産であった共有林が町村の財政的・経済的な基盤として組み入れられていった時代であった。具体的には、集落や村を単位とする共有林への植林事業と、共有の草刈場を対象とした山割による私有化の推進という主に2点によって明治40年(1907)頃から大正期の短期間に一気に進められた。このような変化の背景には、消防組や勤俵貯金組合を通じた財政基盤強化の教育などの国家的政策、奨励金交付や模範林の設置など滋賀県による山林政策があった。また、地方改良運動などを通じて集落の既存の組織が再編され、それにともなって、必然的に地域住民も滋賀県や国家的政策に組み込まれていった。ちょうど青年期から集落や村の中心的な役割を担っていく時期にあったT氏の行動も、このような社会的背景にきわめてよく対応しており、それ以前の里山ランドスケープの中に、政策的な新たな構成要素を導入していく役割を積極的に担っていったことが読みとれる。また、こうした社会的動向に合わせて、植林化とそれに伴う賃稼ぎ、山林の桑畑への転換など、里山ランドスケープの土地と山林資源が、それまでとは違う段階で商品化されていく過程も浮かび上がってきた。

このようなスギ・ヒノキの木材生産を目的とする集落レベルでの植林は、里山ランドスケープの資源利用の中で、明治40年(1907)頃に起点をもつものであった。T氏の作業日数の変遷においても、集落の植林作業にかけられる労働量が明治40年(1907)を起点に増加した。これは、集落の財政基盤のための作業にとどまらず、それまでの現金収入の中心であった「かじや」に変わり、新たな現金収入源としての位置を占めるようになったと考えられる。

柴・割木や山草の資源利用は、明治後期以前から継続されている資源利用であった。柴・割木は、守山集落にとって、燃料としての自給的な利用がある中で、商品としての役割もあったといえる。元禄5年(1692)の守山財産区有文書「村方明細一覧」によると、集落の生業として農閑期に「山かせぎ売薪を行」とあり、すでに江戸初期の段階で商品としての利用がされていた。T氏は、大正期に入ると、年間作業の中で販売のための柴・割木の作業が増加した。これは、時代背景として、割木類に対する社会的な需要が増加し、柴・割木生産が強化された可能性も考えられる。

山草もまた、明治期以前から継続されている資源利用であったが、集落レベルでは明治後期から大正期にかけて、山割を通じて山草の草刈場が縮小した。この期間のT氏の作業量や山草利用のパターンは急激な変化はみられなかったが、緩やかに減少傾向にあった。このように里山ランドスケープにおける資源利用の時間的起点が、個人レベルと集落レベル双方において明らかになったことは、二次的自然の保全管理のためにも意義があると考えられる。

季節的なサイクルの空間的な配置からは、同じ共有林でも植林による財産化が進んだ場所と、植林という選択肢がとられず、従来からの山林資源利用やその季節的なサイクルが変化しなかった場所が明らかになった。季節的なサイクルが変わらなかった共有林の北側では、そこに生育するシデ類やナラ類などの雑木は非常に良質な燃料として地域住民に重宝されていた。この場所は共有林の中でも、日照時間の長い南向きの斜面という立地にあり、村総出の仕事として毎年整備作業が行われる道の存在でアクセスがよかった。そのため、日常的な燃料採取の場として残ったのではないかと考えられる。

里山ランドスケープの歴史の中でも重要なポイントとなる明治後期から大正期という時間軸の中で、伝統的利用における管理作業の季節的なサイクルとその変化を空間上のパターンとして特定できたことは、今後の里山林管理のひとつの指針になりうるであろう。さらに、今回見出せた植物資源の利用に関わる季節的な一定のサイクルは、その地域のランドスケープを構成する植生の更新条件にも何らかの影響を与えていたとみることも可能である。社会的・文化的影响を強く受けたランドスケープ形成過程を詳細に明らかにするための今後の課題と考えている。

補注及び引用文献

- 1) 井手任 (2006): 農村の景観構造と生物相の保全: 景観生態学 10 (2), 71-74
- 2) 藤原道郎 (2005): 特集「景観形成プロセスの起点としての明治期の景観構造」特集にあたって: 景観生態学 9 (2), 1-2
- 3) 堀内美緒・深町加津枝・奥敬一・森本幸裕 (2006): 明治後期の日記にみる滋賀県西部の里山ランドスケープにおける山林資源利用のパターン: ランドスケープ研究 69 (5), 705-710
- 4) 中西僚太郎 (1996): 明治末期～昭和初期の茨城県西部における農村生活の構造—労働の季節のリズムと年中行事・祝祭日・休日—: 歴史地理学会 180, 21-40
- 5) 川口諦 (1977): 『日誌』にみる日常生活の形成と主体: (豊原研究会編『善治日誌』—山形県庄内平野における一農民の日誌—) 所収: 東京大学出版会, 25-45
- 6) 永田恵十郎 (1988): 食糧・農業問題全集 18 地域資源の国民的利用: 社団法人農山漁村文化協会, 224-118
- 7) 滋賀県森林課 (1919): 滋賀県之林業
- 8) 滋賀県 (1928): 滋賀県史 第四巻 最近世
- 9) 滋賀県史編さん室編 (1971): 滋賀県百年年表: 滋賀県
- 10) 原田俊丸・渡辺守順 (1972): 県史シリーズ 25 滋賀県の歴史: 山川出版社
- 11) 志賀町史編纂委員会 (2002): 志賀町史 第三巻: 滋賀県志賀町
- 12) 滋賀県市町村沿革史編さん委員会編 (1962): 滋賀県市町村沿革史 第五巻 資料編一: 滋賀県, 72-73
- 13) 志賀町 (1980): 滋賀郡木戸村誌 資料Ⅱ
- 14) T氏が区長をしていた明治44年4月から大正2年3月の期間の帳面が守山財産区有文書の中に残っている。「明治44年4月 立木売佛覧帳」「明治45年3月 割山諸税及木戸出作協議費取立帳」「大正元年12月 水番賃米取集帳」など。いずれの文書も表紙には区長としてT氏の名前が書かれてある。
- 15) 守山集落の割山関係としては守山財産区有文書「平成元年 (1989) 共有財産明細簿」や「明治38年の山割に関する文書」(滋賀県立図書館所蔵)が残っている。
- 16) 山調方に関する記録には、守山財産区有文書「丁酉明治30年4月1日起 山調方備考録」がある。明治30年4月から昭和63年3月(1997-1988)までの山調方の活動が記録されている。
- 17) 松村敏 (1991): 農作業と村落 二養蚕の村: 日本村落史講座編集委員会編「日本村落史講座第8巻」所収: 雄山閣出版株式会社, 50-68
- 18) 藤田佳久 (1981): 日本の山村: 地人書房
- 19) 堀内美緒・深町加津枝・奥敬一・森本幸裕 (2004): 滋賀県志賀町の2集落を事例とした1930年ごろの里山ランドスケープの空間構造と管理: ランドスケープ研究 67 (5), 673-678
- 20) 大門正克 (1992): 明治・大正の農村: 岩波書店